

本日は復活節第6主日です。今週の木曜日、主イエスはこの地上での働きをすべて終えて天に帰られた昇天日を迎えます。主イエスの決別説教を学んできました私たちは、本日その締めくくりとしてぶどうの木のたとえ話について学びを深めてまいります。

旧約聖書の中でイスラエルはしばしばぶどうの木、または神のぶどう畑として描かれています。イスラエル民族にとってぶどうの木は象徴的存在でした。主なる神につながれた民族であるというわけです。

しかし旧約聖書はイスラエルが正しいぶどうの枝として存在していたわけではないことを記しています。預言者イザヤは、イザヤ書第5章1節から7節の中で、神の御心にかなう実りを結ぶはずのぶどうの木、すなわちイスラエルの人々が正しく歩まず、ぶどう畑が荒れ果ててしまった様子を描いています。

『わたしは歌おう、わたしの愛する者のために、そのぶどう畑の愛の歌を。わたしの愛する者は、肥沃な丘に、ぶどう畑を持っていた。よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り、良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ、わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。わたしがぶどう畑のためになすべきことで、何か、しなかったことがまだあるというのか。わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに、なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。さあ、お前たちに告げよう、わたしがこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれるにまかせ、石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ、わたしはこれを見捨てる。枝は刈り込まれず、耕されることもなく、茨やおどろが生い茂るであろう。雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑、主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに、見よ、流血（ミスパハ）正義（ツェダカ）を待っておられたのに、見よ、叫喚（ツェアカ）』。

イスラエルの人々は、自分たちは主なる神によって義とされたアブラハムの子孫なので、民族と血筋のゆえに神のまことのぶどうの枝であると考えていたのです。しかし主イエスは本日の福音書ではっきりと、『わたしはまことのぶどうの木』と、ご自身がぶどうの木であり、主イエスとつながっているようにと私たちを招かれたのです。すなわち、主なる神が与えようとしておられる永遠の価値への招き、神の救いは、血筋や民族によって与えられるのではなく、主

イエスの枝としてしっかりつながれていることによってもたらされることを示されたのです。

ぶどうは主イエスが伝道された各地でよく栽培されていきましたので、話を聞く人々にとっても身近な存在でした。ぶどうの木は根は長く、強い勢いで枝を伸ばしていくそうです。そしてその枝全部によいぶどうの実が出来るのではなく、若木は三年間実を結ぶ前に刈り込まれ、実のならない枝は容赦なく切り落とされることになっていました。このようにぶどうの木は実に多くの手間を経なければよい実を結ぶことが出来ず、また切り落とされた枝は柔らかいため何にも再利用できず、燃やしてしまう他はありませんでした。主イエスは人々がよく知っているぶどうの木を譬えとして語られ、これらのような多くの手間をかけておられる農夫が主なる神であると言われたのです。

主なる神はたくさんのよい実、すなわち人々の思いと言葉と行いによる御心にかなう実を求めておられ、そのためにたくさんの手間をかけてこられました。旧約時代は預言者たちを遣わし、そして主イエスをこの世に遣わして天国を宣べ伝え、罪に沈んだ人々を主なる神につなげるため、十字架の購いを全うされました。しかし人々は主なる神の御心に歩まず、ぶどう畑を荒地にしてしまった。そしてあなたがたは墮落したぶどうの木になってしまったと語っているのです。

主イエスにつながっていないさい、そうでなければあなたがたは決してよい実を結ぶことが出来ないというのです。農夫である主なる神は、よい実を結ばない枝は切って捨て、よい実を得るために枝を必要なだけ残してあとは捨ててしまう、よい実を結ぶのに重要な最初のことは、主イエスにしっかりつながっていることなのです。主イエスは必ず、御心にかなうように生きる力を与えてくださる、常日頃よりそのことをしっかりと心に刻むことが勧められているのです。

そして主イエス決別説教最後のメッセージは、あなたはどう生きるのか、どう決断するのか、と主イエスが問いかけておられるということです。私たちは自分の意思を持つぶどうの枝です。よい実を結ぶための招きに従うことも出来れば拒否することも出来ます。従うことを知りながらも、誘惑に負けて正しく歩めない枝でもあります。農夫である主なる神が、よい実を結ばない枝は容赦なく切り捨てるというのは、人々を不安に陥れるためでも困難な選抜に勝ち残

れということでもありません。主なる神はすべての枝がよい実を結ぶことを願っておられる、そのために必要な恵みを与えておられる、あなたがたは自ら拒否することのないように、誘惑に負けることのないように、主なる神は、今この時の決断を、常に問いかけておられることをはっきりと私たちに示されたのです。

主イエスが去ろうとしている時、弟子たちはどのような状況にあったのでしょうか。主イエスのすぐそばにいらなくても十分歩いていける状況になったから主イエスは去っていかれたのでしょうか。そうではありません。弟子たちは相変わらず主イエスがいなければ何も出来ず、何も歩み出していけない存在だったのです。彼らは聖霊によって強められねばなりませんでした。地の果てまで福音を宣べ伝えていく使命を担わねばなりませんでした。だからこそ、主イエスは去らねばならなかったのです。世界に福音が告げ知らされる時がすぐそこに迫っていました。そしてこの務めは、弟子だけでなく、距離と時間を超えてキリストに連なるすべての人々にもたらされているのです。

『あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものは何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる』

まことのぶどうの木である主イエスにつながり、日々益々御心にかなう存在へと招かれていきましょう。